I－27

昭和南海地震体験談の収集と結果の活用

愛媛大学大学院　学生会員　○久木留 貴裕
愛媛大学大学院　フェロー　森 伸一郎
愛媛大学大学院　学生会員　門田 慶史

1. はじめに

自主防災活動が効果的かつ組織的に行われるためには，自主防災組織の充実強化が必要とされている[1]．しかし，現状では，組織の結成には至っているものの，効果的な活動を行えている自治体や地区は少ないため，有効な自主防災活動が模索されている段階である．そして，地域における自主防災活動の活発度は，防災に対する意識の高さや知識の量に依存していると思われる．さらに，住民の防災意識は災害体験の有無に強い相関があると考えられる．また，実際の災害体験がなくても地域住民の災害の体験談を聞くことや知ることによる追体験は，地域の防災意識の向上に効果的であると推測できる．

著者らは，これまでに愛媛県内において昭和南海地震体験談の収集を実施して，県内で体験談の収集が十分に可能であることを明らかにしている[2]．さらに，体験者や体験談の聴講者に対して，体験談に対する意識調査を行い，体験談が自主防災活動に有意義であるという意識があることを明らかにしている[3]．本論文では，新たに愛南町久良地区において体験談を収集し，体験談の活用について考察したので報告する．

2. 久良小学校での地震体験談収集と児童の意識調査の概要

今回は小学生を主な対象とし，愛南町久良地区にある久良小学校協力の下，全児童（51 人）に対し，「地震体験談を聞く」という宿題を，冬休み（平成 20 年 12 月 24 日課題付与，翌年 1 月 8 日提出）の課題として用意した．宿題の内容は，「聞いた体験談の内容」と「体験談を聞いた感想」をワークシートに記述して提出させるというものである．地震体験談の対象は，終戦翌年の昭和 21 年 12 月 21 日に起きた昭和南海地震を主とするが，昭和 35 年 5 月 23 日のチリ地震津波など他の地震でも良い．また，他の地域での体験談でも良い．そして，聞く対象は，祖父母・父母・兄弟などの家族か近所のお年寄りとした．一方，教員には，近所に聞きに行く際に 2～3 人で訪問して良いなど適切な助言を求めた．また，ワークシートには，体験談の提供者の氏名，年齢，体験場所などの属性の記入欄も設けた．

ワークシート回収後に，特に地震の揺れ，家屋や周辺の被害，津波の到達位置について記述のあるものを選出し，体験場所や家屋や周辺の被害のあった場所，津波の到達位置について可能な人に対して追加でヒアリング調査を実施した．その際に，1/2500 地図を用意し被災した場所や津波の到達位置などを書き込んでいった．また，体験談の提供者には，体験談を聞いている時の児童の様子や，これまでに体験談を家族や近所の人に伝えたことはあるかなどの質問もした．

3. 児童による体験談収集と児童の感想

ワークシートは全児童 51 人から回収できた．回収率は 100 %である．そのうち 39 人が久良地区での体験談を収集していた．兄弟などで同一人物から話しを聞いているため，28 人の体験談を集めた．このことから，児童に体験談を収集させることで，地区内での体験談をたくさん収集できることが確認できた．

図-1 に児童の感想にあった単語の頻度分布を示す．この図で，一人の児童から複数の単語があったので，頻度はのべ人数である．また，図中には一人のみの単語については，その他でまとめている．これによると，「恐怖」を感じている人が最も多く，多くの児童に対し，地震の体験談は地震や津波の恐怖を抱かせる効果があると考えられる．

4. ヒアリング調査の結果

ヒアリング調査の結果，10 人の体験談提供者から児童が集めた体験談では不十分だった具体的な被災場所や津波の到達位置を確認することができた．**図-2** に久良地区における体験談に基づく津波ハザードマップを示す．図中には体験談提供者が体験した地震とその位置，さらに，被災箇所や津波の到達位置を示してある．

津波到達位置に関しては，昭和南海地震，日向灘地震，安政南海地震による津波の到達位置を示してある．安政南海地震による津波の到達位置に関しては，体験談の提供者が家屋などの流出した地点を知っていた．そのため，図中の安政南海地震の津波到達位置は最低ここまで来たというもので，この地点の家屋が流出していることを考えると実際には，さらに陸側まで津波は到達していると考えられる．

このように，地区内で複数の体験談を収集することによって，地区内での過去の地震による津波の到達位置を確認でき，体験談に基づく津波ハザードマップを作成できることが確認できた．

さらに，体験談を家族や近所の人に伝えたことはあるかという問いをした．5 人の方から回答があり，4 人からは「ない」と回答があり，1 人は「普段からよく話す」と言うことだが，「宿題だから話した」や「ワークシートがなかったらあんまし」と言うようなコメントがあった．そして，体験談を聞いていた時の児童の様子をどのように受け止められましたか，一生懸命聞いておられましたかという問いをした．5 人の方から回答があり，4 人からは，「一生懸命聞いていた」とのことで，1 人は「わからない」とのことだった．

このため，このようにして地震の体験者に体験談を聞くことは，普段話されることのない体験談を話すきっかけとなっていることがわかる．さらに，宿題ではあるが児童にとってお年寄りの地震体験談を一生懸命聞く機会ともなり，世代間における地震体験談の共有に役立てていると考えられる．

今回作成した体験談に基づく津波ハザードマップは，愛南町防災担当から高い評価を得て，平成 21 年 3 月 8 日に行われる予定のフォーラムで活用することになった．今後の展望として，体験談によって判明した昭和南海地震の津波ハザードマップからシュミレーションし外挿することで，安政南海地震の津波高さを算出することが可能である．このように体験談に裏付けられた地域住民にとって信頼度の高いものができた．これを見ることによる児童・青年の意識を評価することが重要であるというところまで指摘した．

5. 結　論

愛南町久良地区において，昭和南海地震体験談を収集し体験談の活用について検討した．得られた知見は以下の通りである．

(1) 児童に体験談を収集させることで，地区内で多くの体験談を収集できることが確認できた．

(2) 地区内で複数の体験談を収集することによって，地区内での過去の地震による津波の到達位置を確認でき，体験談に基づく津波ハザードマップを作成できることが確認できた．

(3) 児童が地震の体験者に体験談を聞くことは，体験者が普段話されることのない体験談を話すきっかけとなっている．

謝辞：本研究を進めるにあたり，愛媛地震防災技術研究会，愛南町，久良小学校の皆様に多大な協力を戴きました．記して，感謝致します．

参考文献 1) 内閣府：平成 20 年版　防災白書．2) 森 伸一郎，久木留 貴裕：地域における地震体験談の収集と共有，地域安全学会梗概集，No,22(2008)，pp.75-78，2008．3) 久木留 貴裕，森 伸一郎：昭和南海地震などの地震体験談の収集と地震工学・土木工学の活用，21 世紀の南海地震と防災，第 3 巻，pp.47-58，2008.12.

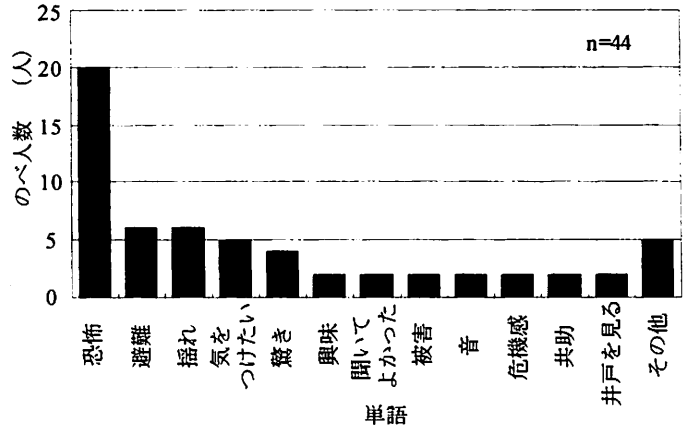

図-1　児童の感想にあった単語の頻度分布

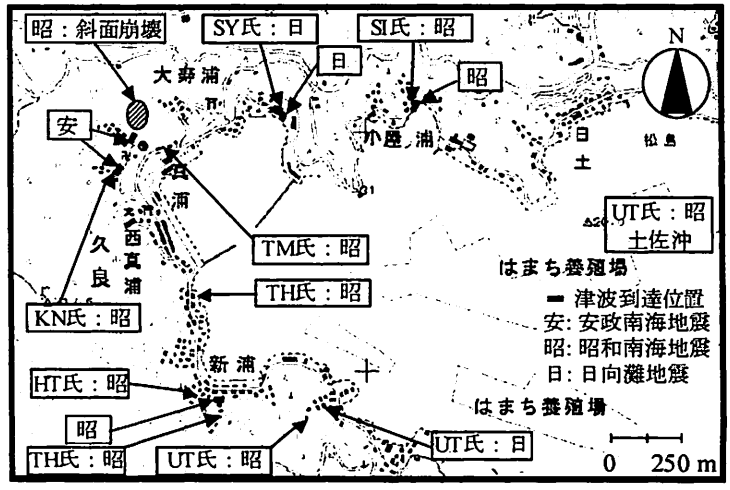

図-2　久良地区における体験談に基づく津波ハザードマップ